

【1. 学業面での成果】

私はオランダのErasmus University Rotterdamの傘下にある、社会科学研究所（International Institute of Social Studies）通称ISSの開発学部に入りました。デンハーグはオランダの政治都市と呼ばれており、国会議事堂や大使館、旧王宮が立ち並ぶ落ち着いた街です。

私が入学した開発学部には今年120名の学生が入学しました。学生の80%が発展途上国から来ており、優秀かつ経験豊富な学生が多く、日々異なる視点からの考えを気ことができ刺激を受けています。

授業は9月中旬からTerm1A、11月からTerm1Bが始まりました。このTerm1A/Bはこの開発学修士コースにおける基礎を固める学期として位置づけられています。

Term1Aでは、開発学の基礎となる、社会学、政治学、経済学、開発学基礎（Term1A/B継続）の4科目に加えてアカデミックライティングのクラスを受講しました。いずれも初めて学ぶ学問で、加えて英語で授業を受けた経験もなかったため、初めの一ヶ月は特に苦労しました。しかし次第に英語にも慣れ、Term1Aが終わる頃には、社会学・経済学・政治学がどのように社会に作用するか、理論を実例に当てはめてみるというサイクルをこなし、理解を深められるようになりました。学期終了時には試験もありましたが、無事全ての科目の試験に無事合格し、単位を取得することができました。

Term1BはTerm1Aが終了した翌週、10月最終週より始まりました。このTerm1Bではそれぞれの専攻分野に特化した授業が始まり、私はCritical Social Policyというクラスを同じコース（社会政策コース）の学生と共に受講しています。このクラスは社会・福祉政策が、実社会にてどのように作用しているか、批判的な視点で学ぶクラスです。政策が予定通り作用しない、またはネガティブな結果をもたらしてしまうようなケースについて経済、ジェンダー、民族等の視点を用いて他の学生と共に議論を進め検証を繰り返しました。

週に3回行われる授業ではその都度、学生が自国の社会政策を例に挙げ議論を進めますが、その国の経済状況により大きく異なる部分もあれば、共通する部分もあり、この共通点・相違点が議論を盛り上げています。例えば、今現在私が課されている課題では、日本の技能実習生制度を例にメリット・デメリットを論じています。この制度により技能を得る実習生もいれば、低賃金労働者や不法滞在者に転じてしまうケースもあり、制度が策定された当初には想定されていなかった問題点が浮かび上がっています。

Term1A/Bでは開発学とはどこから始まり、何を指すものなのか、国政協力の必要性を問う場面も多くあり、日本政府による国際協力の現場での経験を持つ私には根本を覆すような議論ばかりでした。日本の大学やヨーロッパの学生が多い他大学では経験できなかったであろう、援助側、援助を受ける側という垣根を超えた、多様性に富んだ議論に加わることができ、このエラスムス大学に来て良かったと改めて感じています。



写真1. ISSの玄関にて



写真2. デンハーグはトラムが発達しています



写真3. 寮の近くにある国際司法裁判所。
最近ではロヒンギャ問題が扱われていました。



写真4. 徒歩圏内にある、だまし絵で有名な Escher の美術館にクラスメイトと行ってきました。(撮影時のみマスクを外しています。

【受入地区でのロータリーとの関わり、奉仕活動、カウンセラーとの交流】

受入地区のロータリークラブが実施するボートトリップに9月中旬に参加しました。カウンセラーを引き受けてくださったNielsさんともお会いしましたが、Nielsさんは東京にて勤務されていた経験から今回カウンセラーを引き受けてくださったそうです。今後会員の方のお宅を訪問し交流するなど、様々なアイデアが挙げられましたが、その後、新型コロナウイルスの感染者数の増加により、ロックダウンが始まったため、未だ実現しておりません。加えて当該クラブは奨学生の受入れの経験がないため、今後の奉仕活動・交流については他クラブの事例も参考にしつつ、このコロナ禍でも実現可能な活動を見出していきたいと考えています。

【2. 直面した課題、問題点等】

現在直面している課題は二つあります。一つは議論の場の少なさです。これまで全ての授業がオンラインで実施されており、教授や他の学生との議論の場が限られています。本来であれば密に連携を取ることで授業の内容をきちんと理解を深められたと思いますが、オンライン授業であることに加え、他の学生との接点も少ないため、このコースの特色である多様なバックグラウンドを持った教授・学生との交流が限られている点が非常に残念だと感じています。1月下旬からはロックダウンも解除され、対面での授業も実施される可能性があるため、期待したいと思います。

二つ目は自身の英語力についてです。週に合計すると80ページほどの論文を読むよう課されていますが、読むペースが遅く、すべてを読み切れていない状況です。読み方にはコツがあるようで、要点や論点の変わり目に着目しながら効率良く読むよう日々指導を受けておりますので、早くこの読み方に慣れ、効率よく課題をこなせるよう、今後も努力していきたいと思っています。

【3. 今後の課題、目標】

これまでのTerm1A/Bでは英語に不慣れだったことから、授業の理解度も低く、論点がずれてしまうことが多々ありました。今後は効率よく文献を読み進め、教授とも密に連携を取り、論点がずれないように気を付けて授業に臨みたいと思います。また、コロナの状況にもよりますが、東ドイツ政権によって作られたベルリンの壁や、ジュネーヴにある国連本部等、開発学において非常に重要な歴史を持つ場所を訪問し、ヨーロッパで発展した開発学への理解と深めたいと考えています。

また5月頃には修士論文のテーマを決める必要があるため、新型コロナウイルスの状況下で実現可能な研究テーマを指導教官と共に考えていきたいと思っています。